

収穫可能な期間が長い8月穫り丹波黒大豆枝豆新品種の育成 ～品種特性と普及に向けた展望～

農林水産技術センター 生物資源研究センター 応用研究部 内藤 一平

1 はじめに

黒大豆枝豆『京 夏ずきん』（構成品種「夏どり丹波黒2号」）は、主に7月下旬から8月にかけて流通する京都府特産の枝豆である。「夏どり丹波黒2号」（以降、現行品種）は莢の黄化が早いため、収穫可能な期間が短い。このことが、近年栽培面積と販売単価が伸び悩む一因となっている。この問題に対して当センターは、収穫可能な期間が長い枝豆新品種の育成に取り組んできた。本報告では、新品種候補系統「E17-10」の特性や今後の現地普及について概要を報告する。

2 新品種候補系統「E17-10」の栽培特性

(1) 枝豆としての生育・収量特性

2020～2021年の2年間、生物資源研究センター（精華町、以降生資研）で「E17-10」の生産力検定を実施し、現行品種との栽培特性を比較した。その結果、「E17-10」は現行品種と比較して莢数が有意に少ないものの、莢が厚く多収だった。また、黄化莢の出現が遅く、収穫期間は約5日長かった（図1）。2021～2022年には府内農家ほ場（南丹市・綾部市・京丹後市）で現地適応性試験を実施した。生資研での生産力検定の結果と同様に、現行品種と比較して「E17-10」は莢が厚く黄化莢の出現が遅い傾向が認められた。

(2) 大豆種子としての生育・収量特性

枝豆品種の普及には、良質な種子の安定生産が必要である。今回、目標値を発芽率80%および反収70kg/10aに設定した。2022年に、生資研、現行品種の採種実施機関である京都府原種農場（南丹市八木町）および厚沢部農業公社（北海道檜山郡）で「E17-10」の採種栽培を実施した。その結果、生資研では発芽率・反収ともに目標値を下回った。しかし、原種農場および厚沢部農業公社では現行品種と同様に発芽率80%を越えた。反収は、厚沢部農業公社でのみ70kgを越えた。以上から、現行品種と比較し収量はやや低下するが、品質は同程度の種子を生産できる可能性が考えられた。

3 今後の展開

新品種候補系統「E17-10」は、2023年夏頃に品種登録出願する予定である。2024年以降の品種登録審査を経て、2025年に『京 夏ずきん』ブランド新品種として流通開始の見込みである。また、莢数の少なさによる低収リスクを解決するため、次年度から農林センター（亀岡市）と協力し栽培試験を実施し、品種切替までに栽培マニュアルを作成する予定である。

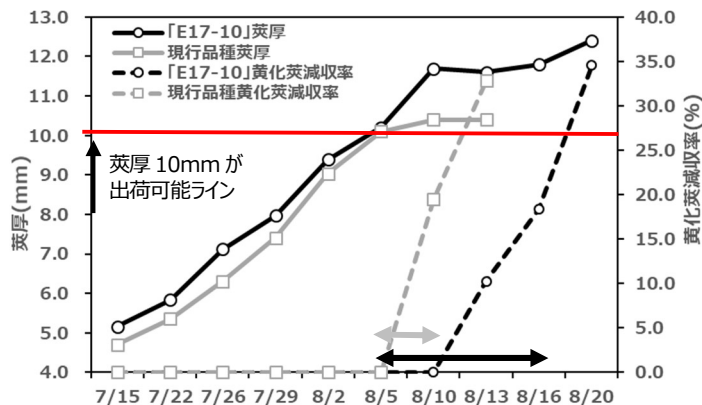


図1 「E17-10」及び現行品種の莢厚・黄化莢減収率の推移(2021年調査)

両方向矢印が収穫期間を示す。黒色：「E17-10」、灰色：現行品種